

させたいと思っています。さらに、行政にはどうか帰国外国人特別措置の来日5年間まで延長をお願いしたい気持ちです。彼のような意欲も能力もある子どもが、日本語能力が十分ではないという理由で進みたい進路に進めないとしたら残念でなりません。そして、さらに頑張って進学を果たした外国籍の高校生への日本語の配慮も同時にぜひ行って欲しいと思います。他県では高校入試において「帰国外国人枠」があるところ、また、高校進学後も日本語の支援がある高校もあると聞きます。努力して高校進学を果たした生徒に対して、本県においても小中学校に引き続き日本語の支援が望まれるところです。

HANDS進学ガイダンス、10年の歩み…本当にいろいろなことがありましたが、振り返ってみると「できるだけ早く情報を提供してあげたい」と強く思っています。中学生になってからの方が確かに進路を見据えてのより具体的な「情報提供」になりますが、日本人家庭に対して圧倒的に高等学校についての情報をもっていないのが現状です。できれば小学生のうちにガイダンスに参加して親子で日本の教育制度について知識をもつことで、その時々何をすればよいのか、どう頑張ればよいのかを考えるきっかけになると思います。最後に、この「多言語による進学ガイダンス」は毎回の参加者アンケートで高い満足度を得ています。今後も様々な機関や人々のご理解とご協力のもと、これからも続いていくことを願っております。

進路指導の現場から思う、ハンズの取り組み10年

栃木県中学校教育研究会 キャリア教育・進路指導部会 研究委員 山中 亮

宇都宮大学国際学部の「多言語による高校進学ガイダンス」の協力スタッフにと、声をかけられてから10年も過ぎました。それまでも、日本に来て学習に苦しみながらも、懸命に生きようとする外国人・日系人と多少は接する機会がありました。本人よりもそれ以上に日本語が分からない保護者との対応は難しいものでした。学校生活では、友人も作れ日本の生活になじんできても、卒業となると高校進学問題、就職問題のハードルは高いのです。

今、中学校の現場では多種多様な問題に追われ、多忙の一言です。生徒の将来につながる「キャリア能力」の育成が急務であると言われ、自分は関東や全国での研修等に参加し、その必要性を大きく感じ、栃木県内での研究大会の主催者側になり、20年近く携わってきました。しかしその実践となると、どうでしょうか。校内でその余裕があ

るでしょうか。別に目新しいことをやるわけではないのに、「キャリア教育」は二の次です。友人トラブルの生徒指導や保護者対応、前年どおりで進む学校行事の準備。本当に伸ばしたい、伸ばすべき子どもたちの力は、人それぞれです。どう生きるかは、自分で考え、自分で求め、もっと自由があるのだけれど、一斉指導の中でどれだけ一人一人に寄り添えるのでしょうか。やっていないわけではないが、十分とは言えない。もっと、子どもたちにいろいろな生き方、考え方があることを伝えたい。まだ見つからない自分の力を知り手がかりを探すような取り組みをしたい。——今年3月定年を迎え、やり残したことがばかり思い浮かびます。

さて、ハンズの取り組みもまた、学校現場からすると、多忙の中十分ではない「キャリア教育」を補完する大きなものでした。出会った外国人の子どもたちは、ほとんどが日本での生活を希望していました。日本と母国の間での夢を語れる子。まだ日本での生活がままならない子。「多言語による高校進学ガイダンス」は、そんな子どもたちの話を聞き、スタッフでアドバイスをするだけの機会ですが、本気で応援する気持ちを伝えてやりたかった。表情が少しでも明るくなって会場を出て行く姿を見ることしかできなかった。その後、どうなったのでしょうか。ガイダンスへの参加者は、県内の中学生のほんの一部に過ぎないことも事実です。しかし、このような機会を作ることで、学校現場での進路指導(キャリア教育)を立派に補完していることが重要なのです。これから、このような取り組みが、各地で開かれ、身近な相談の場として広がること。学校現場との相互理解が深まること。これまでに果たしてきた実績も大きいですが、今後の活動への期待が大きい取り組みだと改めて思います。

フィリピン語の通訳者として

フィリピン語の翻訳・通訳者 市川恭治

私は京都で生まれ、大学は静岡大学で農学部を卒業しました。大学卒業後、上智大学でフィリピン語を学びました。現在、環境問題のコンサルタントとして、フィリピンの環境にかかわりながら、フィリピン文化研究会を主宰し、アジアからの出稼ぎ労働者支援などの、NGO活動にも関わっています。

HANDSとの出会いは2010年度で、以来、「多言語による高校進学ガイダンス」でずっとフィリピン語の通訳を務めてきました。フィリピンやフィリピン語とは、通訳・翻訳者などを通じて、HANDSと出会う前から、長年関わってきました。HANDSは

『中学教科単語帳—日本語⇄フィリピン語』という立派な学習辞典を刊行しましたが、私はこれまで、『日本語—フィリピン語実用辞典』(1994年)、『日本語—フィリピン語両用会話集—出会い・プロポーズ編』(2002年)、『日本語—フィリピン語両用会話集—結婚・生活編』(2005年)、『フィリピン語—日本語実用辞典』(2006年)の4冊を出版しました。

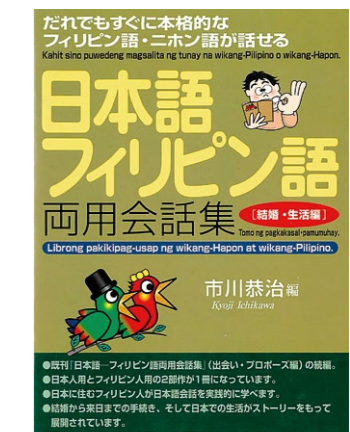
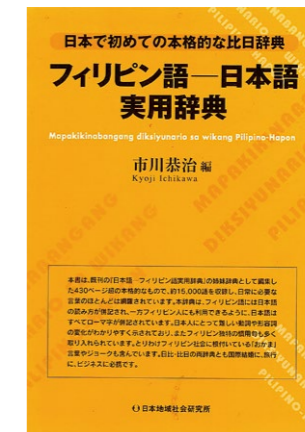
最初の辞典である『日本語—フィリピン語辞典』は、現代フィリピンとの交流を深めるために、日常会話に必要な9000語の日本語をフィリピン語(タガログ語)に訳し、文法なども解説したものです。日本人用の辞書ですが、少し仮名や漢字が分かるフィリピン人がもっと日本語を覚えるためにも使えるように工夫したものです。その続編といえる『日本語—フィリピン語—日本語実用辞典』は、430ページ超の本格的なもので、約15000語を収録し、日常に必要な言葉のほとんどは網羅されています。本辞典は、フィリピン語には日本語の読み方が併記され、一方フィリピン人にも利用できるように、日本語はすべてローマ字が併記されています。日本人にとって難しい動詞や形容詞の変化がわかりやすく示されており、またフィリピン独特の慣用句も多く取り入れられています。日比・比日の両辞典とも国際結婚に、旅行に、ビジネスに必携です。HANDSのフィリピン語単語帳で勉強した児童生徒が大人になったら是非勉強に利用してほしいと思っています。

宇都宮市内の小中学校に在籍するフィリピン児童生徒への学習支援(日本語指導)にも日本語指導員として10年以上関わってきました。現在は、コロナの影響でキャンセルになった案件もあり、1人のフィリピン人小学生の指導をしています。長年の経験からすると、統計的には確認していませんが、高校進学できない、あるいは高校入学できても中途退学してしまうフィリピン人生徒は他の国籍・母語の外国人生徒よりも多い気がします。だからなのか、宇都宮大学国際学部のフィリピンルーツの学生に会うと、よくここまで来れたと嬉しくなります。厳しい状況に直面しているフィリピン児童生徒と出会ってきたことが、HANDSに関わってきた大きな要因ともいえます。

現在、日本で暮らしているフィリピン人は、中国、韓国、ベトナムに次いで多く、約28万人います。栃木県では、5千人を超えるフィリピン人がいます。今後、もっと増えていくのではないのでしょうか。

私自身教育支援に関わってきたことから特に感じているのかもしれませんが、HANDSのような教育支援の活動は、ある意味地味で、顕著な成果がすぐに見えるような形で出てくるわけではないものです。そのような活動を地道に10年進めてきたことは実は凄いことに関係者に敬意を表したいと思えますし、その一躍を担ってきたことを感慨深く思います。今後

とも、フィリピンとの交流、未来を担う子どもたちの教育支援に取り組んでいきたいと考えています。



ガイダンス体験レポート

夢をもち、人生は自分次第!

豊田市立保見中学校教員 伊木 ロドリゴ

私の名前は、ロドリゴです。ブラジルで生まれました。27才です。愛知県の豊田に住んでいます。その豊田市で英語の先生をしています。

10才で日本に来ました。その時、日本語は全くわかりませんでした。私は、日本語の能力がゼロだったので、みんなから「ばか」とよく言われていました。

先ほどの高校進学ガイダンスの話を、小中学生のみなさん、興味を持って聞いていましたか?自分たちがこれが欲しいな、これがないと困るな、と思ったら、自分で本気になって選ぶと思います。だから、この高校ってどんな部活があるの?その高校に行ったら、どんな勉強ができるの?ということ自分で考えると、楽しそうな学校を選べるんじゃないかな。

僕のお父さんがある日、汚い作業着を着て帰ってきて、「ロドリゴ、お前もこうなりたいのか。汚い作業着を着て、仕事したいのか?」と言いました。

僕は、「いやだ」と答えました。「じゃあ、お前の今の仕事は何だ?」と言われ、「勉強かな」と答えました。学校に行くと、勉強する一番の理由は、今学校に行くと学ぶことがあとでそれが君たちのご飯になる、君たちが欲しいカッコいいバイクになる、車になる、フットサル場付きの家になるから、だと思います。

仕事をしていると単調な毎日だな、仕事に行きたくないな、と思う日もあります。でも、学校に行くと、部活ではサッカーを、授業では英語を教えていて楽しいですし、学活の時

間では学級の子どもたちとたくさん遊べて楽しいです。だから、給料はあまり高くなくても今の仕事には大満足です。

みんなは、どんな夢を持っているかな。今、大人の人たちは、たくさんの失敗などを経験して、「そんなの、難しいよ」「そんなの、無理だよ」という思い込みがあって、ついそう子どもに言ってしまうがちです。「その夢、難しくない?」と大人が言うと、「夢持つことって難しいな」と子どもは思ってしまうのではないかな?もっと、私たち保護者や教師が、「できるよ。やってみようよ」と言って、やりきるまでやらしてあげないといけないのではないのでしょうか。

苦しいけど、そこをがんばる。今やっておけば、あとが楽しい。親が仕事から「疲れた～」と帰ってきたら、それを子どもが見て、「大人って疲れるんだな、つまないんだな」と思っちゃう。そうすると、多分、子どもはあんまり夢を見なくなってしまう。大人になってもいいことないんじゃないかと思ってしまう。でもね、大人になると、めちゃくちゃ面白いよ。

僕は以前、東海テレビに出演したことがあります。「夢のちから」という番組です。観てみましょう。

「番組の主な内容:

ブラジルで貧しい生活を送っていたロドリゴさん。日本に来た頃は、からかいやばかにされたことも。みんなと友だちになりたい反面、友だちを見返したい気持ちも。高校進学後、白血病を患い、7ヶ月間闘病生活を送る。入院中、友だちからメッセージの書かれたサッカーボールを贈られ、退院後はサッカーに打ち込み勉強にも励み、スピーチコンテストで優勝の経験も。愛知県立大学に進学後は、大学2年生の時に豊田市で日本語教室を開く。不況のあおりで、就職困難なブラジル人に採用面接対策を施す。その後英会話教室を開く。将来は、日本とブラジル、そして世界中の人のかけはしになりたいと考えている。」

番組中に映っていた教室は、知り合いから借りて、家族4人で、ペンキを塗り、机を作って、開いた教室です。大学2年生の時に開きました。

大学の学費は決まっています、例えば、その金額を100円とすると、100円で5科目とるのも、10科目履修するのも、自分の自由。だから、僕は、授業をとりまくりました。どっちみち100円を払うなら、100円でできるだけのものを吸収したいな、という貪欲さが僕には当時あって、いろいろ学

びたいなと思いました。インドネシア語、フランス語、スペイン語、ラテン語等、履修しました。例えば、インドネシア語は、簡単なあいさつ程度しか覚えてはいないけれど、大学の先生に文化や習慣や生活についての話が聞けたので、楽しかったです。その知識をいつか先生になったときにつかえればいいな、とっていました。

2年後は、オーストラリアの大学院に進学しようと思っています。英語の教え方を学んだり、色々な人に出会って、こんなこともできるということをもっと考え直したいです。そして、日本に戻ってきたら、高校でサッカーを教え、そのあと、ブラジル人学校を開きます。やろうと思っているのではなくて、僕はやります。新しいブラジル人学校のスタイルを作って、実行します。60才になったら、マンチェスターユナイテッドの監督に。遠いし、難しいけど、今は、60才になったときには、そこにたどりつきたいという夢があります。できる準備をちょっとずつやっていきます。こんな僕の夢を、みなさん、どうぞ笑って下さい。僕は、中学の頃は日本語がわからなかったから、クラスの仲間「将来教師になりたい」と言ったら、「お前、無理でしょ」「日本語話せないじゃん」「漢字書けないじゃん」と笑われました。でも夢を叶えました。子どもも大人も、他人に笑われても夢を持って欲しいです。

自分の夢を公言すると、逆に自分にプレッシャーになって、またがんばれますよ。人生は、自分次第。自分がやりたいことを考えて、努力すれば、やりきった感、達成感を味わえてより良い生活ができると思います。若いみなさんは、まだまだ長い人生がありますから、やりたいことややりたいことを考えて、それを実現するために今勉強をがんばりましょう。夢を叶えるために今がある。今ががんばって、やがては笑顔で過ごせるようになればいいんだよね。

またみなさんとどこかでお目にかかることを楽しみにしております。



●HANDSnext vol.15(2013年11月11日)

外国人であること

宇都宮大学国際学部1年 アギーレ ナルミ

外国人であること。私は、外国人であることに恥ずかしさを持っていました。正直に言えば、自分が外国人であることが嫌でした。外へ出るたびに偏見をもったような目で見られ、私の方を見ながらこそこそ何かを話す。その場から逃げたいほど、嫌になったのを覚えています。そのくらい、自分が外国人であることが嫌だったのです。

日系ペルー人の父と、ペルー人の母の間に生まれた私は、日本で生まれ、日本で育ちました。保育園、小学校、中学校、栃木県内の県立高校と日本人と変わらず成長をし、生活をしてきました。幼い頃から内気だった私は、人前に出ることや、話すことが苦手で、とにかく目立つことが嫌いでした。小学生になり、新しい環境へと飛び込んだ私は、自分が外国人であることを気にし始め、同時に少し心細くなりました。なぜなら、周りのみんなが日本人で、自分だけが外国人であったからです。いじめを受けていた訳ではありません。しかし、なぜか仲間はずれにされたような気持ちになったのです。自分が生まれ育った国であるはずなのに、なんとなく自分がよそ者であるかのような気がしたのです。それから私は、外国人であることに恥ずかしさを持ち、自分を隠すようになりました。周りとの違いを受け入れることができなかつたのです。

しかし、そんな私は、ある人との出会い、言葉をきっかけに、変わることになりました。そのある人とは、私が中学校二年生だった時の担任の先生でした。クラス担任を務めるのは初めてということを知り、自分のような生徒を受け入れてくれるのか不安でした。そんな私を助けてくれたのがスタンダードダイアリーという一冊の日記のようなものでした。毎日欠かさずその日記を書き、そのたびに、先生がコメントをしてくれました。最初は、その日の出来事だけを書いていました。しかし、書いているうちに、だんだんと先生に心を開くようになり、悩みを打ち明けられるようにもなりました。どんなことでも真剣に話を聞いてくれる先生を、少しずつですが私は信用するようになりました。そんな時、先生がある言葉をくれました。それは、「二つの国を大切に思えることは、とても素敵なことです。自信を持って自分を表現していきましょう」という言葉でした。今まで、自分を隠していた私をまるで知っていたかのような、そんな言葉でした。

私は、この言葉をきっかけに、外国人であることへの恥ずかしさを少しずつ持たなくなり、むしろ誇りを持てるよう

になりました。もっと自分を出そう、自分に自信を持とう、そう思えるようになったのです。それからは、積極的に人前に出たり、いろんな人と関わるようになり、自分の中での世界が広がったような気がしました。

外国人であること。決して恥ずかしいことではありません。母国を出れば、誰でも外国人なのです。偏見を持った目で見られることは、今までと変わらずあると思います。しかし、何よりも伝えたいことは、自分と同じ立場である外国人児童生徒の皆さんには、外国人であることを、決して消極的に捉えてほしくないということです。周りとの違いを一つの個性として前向きに捉えることには時間がかかります。私自身、完全に前向きに捉えることができていないのですから。しかし、様々な経験を通して、いろんな壁にぶつかって、達成することで克服することができるのです。だから、「外国人だから…」という理由で立ち止まってほしくないのです。私自身の財産である経験を活かし、ただひたすら前へ前へと進み、将来につなげていくことが皆さんの原動力になればと考えています。

日本で外国人として生きていくことは、私にとって旅であり冒険です。



●HANDSnext vol.22(2017年2月7日)

諦めないこと

宇都宮大学国際学部1年 孟 伶諭

私は日本に来て今年で5年目です。この5年の中で、生活の面でも、勉強の面でも大変なことがたくさんありました。今日は、私がどうやって乗り越えてきたのをみんなに話したいと思います。私の経験が、皆さんに少しでも役に立ったら嬉しいです。

私は日本に来た時は中学三年生の時でした。日本語が全くできないままで中学校に入りました。その中学校では、外国人の生徒は私だけでした。言葉が通じないから、友達もできないし、自信を持つこともできなかったです。

元々性格が外向的な私が学校で本当に静かでした。昼休みの時いつも一人でした。その一年では本当に寂しくて辛かったです。その時から高校では絶対このような生活を繰り返したくないと思い、日本語を一生懸命に勉強すると決めました。まずは、家ではひらがなやカタカナを勉強しました。そして、学校の担任の先生から市内の小学校にある日本語教室を紹介してもらいました。私は週1回日本語教室に通いました。自分の分からない文法や難しい言葉など1週間分を整理して、日本語教室に行くときは、たくさんの質問をしていました。日本語教室の先生がとてもやさしくて、中国語もとても上手で大変お世話になりました。今も感謝の気持ちでいっぱいです。日本語教室だけではなく、私は家でも頑張って家族と日本語を使っていました。

高校受験の時に、私は栃木県の県立高校の「海外帰国者・外国人等の受検に関する特別措置」という検査で受験しました。入試内容は3教科と面接でした。そして、国語の入試の代わりに小論文がありました。数学と英語が得意だったので、心配しなかったのですが、小論文はその時日本に来てたった1年の私にとって本当に難しかったです。そこで、私は、まず、中国語で書いて、その後、日本語教室の先生といっしょに日本語に直しました。そして、そ

の中で分からない文法を勉強して、暗記しました。小論文は、いろんなテーマについて、何度も書いて、たくさん練習しました。面接も先生と一緒に何回も何回も練習しました。学校と日本語教室のお陰で無事に高校への進学ができました。

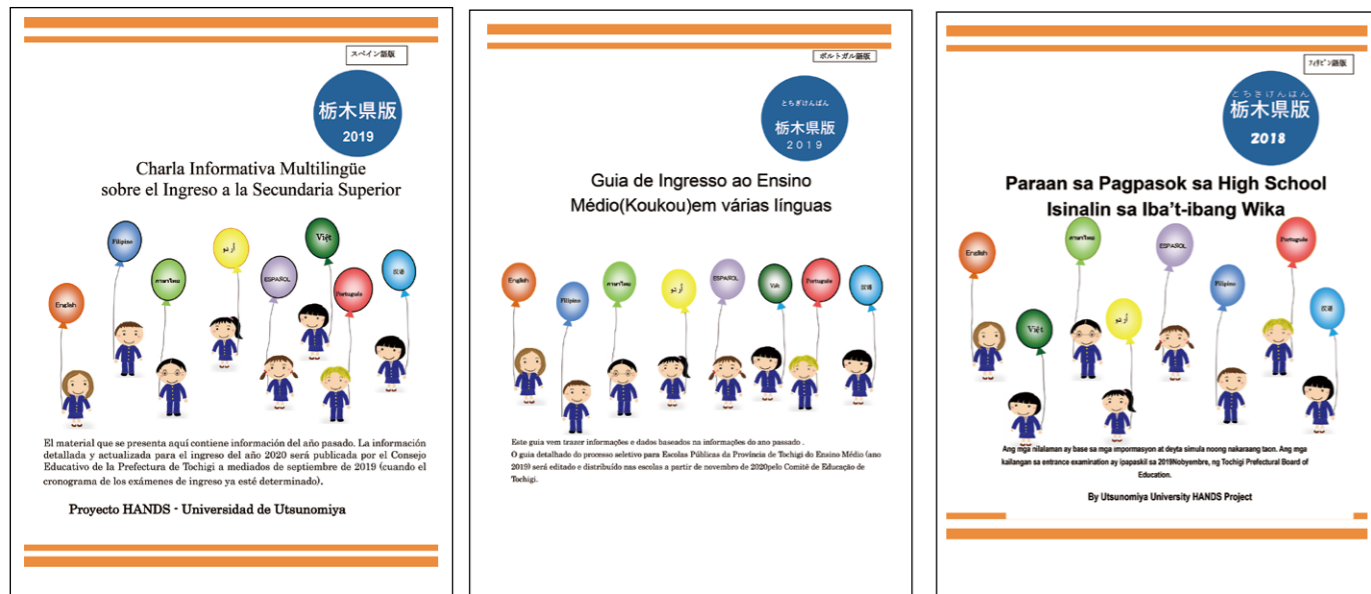
高校に入学できた後、私は自分から声をかけて友達を作ろうとしました。自分の日本語が間違っているとわかってても頑張ってみないと話しました。自分の日本語をたくさん話すことがとても大切だと思います。なぜなら、友達と話すことによって、正しい日本語を聞いて、覚えられるし、自分の間違っている日本語があったら友達が直してくれるからです。私は友達とのコミュニケーションの間でたくさん日本語の勉強になりました。高校では、友達がたくさんできましたので、高校生活は本当に楽しかったです。

今日は私と同じ立場にいる外国人生徒に言いたいことがあります。外国に来て大変なことはもちろんたくさんあります。でも、そこで諦めないで、大変なことを乗り越えれば楽しいことがいっぱいあります。たくさんの困難を克服することによって、自分が成長します。今自分が経験したことはきっと自分の財産になります。

●HANDSnext vol.23(2018年2月7日)



外国人児童生徒教育支援のための 学生ボランティア派遣事業



「多言語による高校進学ガイダンス」資料の一部(スペイン語・ポルトガル語・フィリピン語版)

